

# 佳作

## 転校生

山崎 蓉子

遠い日の  
ひとかけらの想い出が  
冬夕焼けのように  
炎えあがった

「木下サーカス団  
J R京葉線 幕張新都心  
イオンモール  
'24年二月十二日終幕」

京成線市川真間駅の掲示板の  
この広告に  
私の胸は動悸した

思いかえせば  
昭和十九年冬  
父の故郷へ疎開した  
熊本県球磨郡免田町（現あさぎり町）  
球磨川沿いの 県境に近い寒村  
「東京から三十三時間余・・・」  
長い旅だったと母と姉の会話  
五歳のわたしは  
父だけが一緒に来なかった  
淋しさだけを覚えてる

昭和二十二年 二年生の三学期  
「ナカムラ タケオ」という転校生が

わたしの席のとなりに座った  
担任のイトウ先生も  
満州からの引揚者  
わたしも東京からの疎開者  
他者同志は  
親しみあえた

大正町の八幡さまの秋まつり  
「オレの後についてこい」  
ちよっぴり大人びた タケオ君  
わたしは心のなかで  
なんだか 嬉しかった

大きなテント張りの裏口から  
内は きらびやかな照明と音響と  
人の渦と 夢をみているような  
世界だった

しゅくだいも  
ひもじさも  
まずしさも  
くやしさも  
何もかも忘れることが  
できた

サーカスの興業が終ると  
「次の土地へ・・・」 タケオ君が  
言った  
「いつ? どこへ?」  
「来週 オオサカへ」  
オオサカは遠い国のように思えた  
関門海峡の あの長いトンネルを  
くぐって行くのだと言った

「悪いことをしたら」  
「宿題をやらなかったら」  
「盗みをしたら」  
「嘘をついたら」  
サーカスへ売りとばされるぞ  
サーカス団にさらわれるぞ  
土地の人達は言っていた

タケオ君に聴いてみたかったが  
お父さんもお母さんも  
弟も妹も一緒だったので  
わたしは聴かなかった

入場料 リングサイドA席  
四千五百円  
プログラム千円 双眼鏡  
プロマイド お弁当  
最終日の今日を逃したら  
タケオ君との想い出の  
わたしの玉手箱は  
閉じられたまま  
焼却されてしまうだろう

せめて  
エンディング・ノートの  
終章に綴りたい  
交錯する光と音響の余韻に  
あたたまりながら  
冬夕焼けの中を  
帰りの駅へ歩きだした